



三島市郷土館

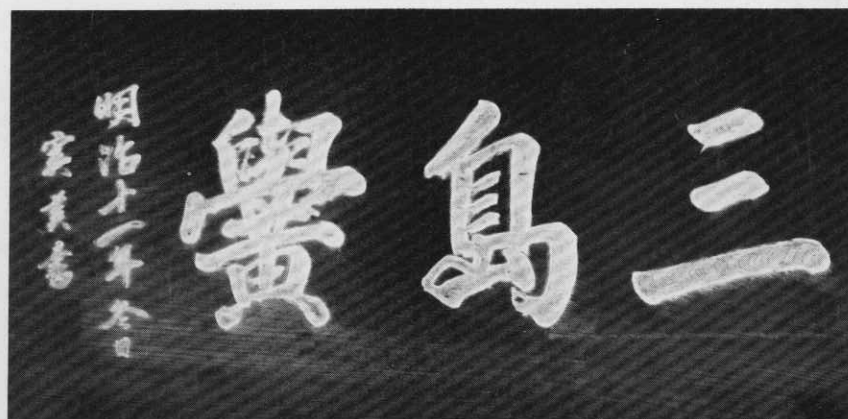
三島市一番町19-3 TEL 71-8228

#547~

特別展

郷土の教育百年展

11月5日 ~ 3月15日



三島市郷土館

郷土の教育年表

時代	西 暦	今から 年前	で き ご と
享保11	1726	248	並河五一 仰止館を開く。
寛政12	1800	172	秋山富南の豆州志稿できる。
文政2	1819	153	吉原守拙 駿河に生れる。
天保9	1838	134	福井雪水、長谷の自宅に千之塾を開く。
〃 11	1840	132	箕田寿平、八反畑に生れる。
明治元	1868	104	吉原守拙、江戸から三島に来る。
〃 5	1872	100	開心庫舎開く、学制が制定される。
〃 6	1873	99	開心庫舎が三島塾となる。保定庫舎、作新学舎、勤有学舎、三谷学校、函山学校、日新学校、中郷学校など7校建つ。
〃 7	1874	98	大場学校建つ
〃 8	1875	97	松本学校建つ
〃 12	1897	93	三島塾新築される。グラント前米大統領が来る。
〃 19	1886	86	小学校令公布される。町立三島尋常小学校と改称。
〃 21	1881	84	バラ女学校が設立される。
〃 22	1889	83	三島に幼稚園開設される。
〃 23	1890	82	教育勅語 発布される。
〃 25	1892	80	組合立高等小学校できる、バラ女学校廃校になる。
〃 32	1899	72	高等女学校令 公布される。
〃 34	1901	71	田方郡立三島高等女学校 開校。
〃 37	1904	68	国定教科書使用実施 日露戦争起こる。
〃 40	1907	65	小学校令を改正、尋常科6年となる。
〃 41	1908	64	組合立高等小学校を解散し、第一・第二尋常高等小学校設立。
大正7	1918	54	三島家政女学校設立。
〃 8	1919	53	三島商業学校(南高校の前身)開設。
〃 14	1925	47	三島第三尋常小学校建つ。
昭和5	1930	42	三島実科女学校設立。
〃 9	1934	38	三島実科高等女学校設立。
〃 10	1935	37	青年学校令 公布。
〃 14	1939	33	第二次世界大戦起こる。
〃 16	1941	31	国民学校令 公布される。太平洋戦争起こる。 三島町から三島市になる。
〃 19	1944	28	学徒勤労令 公布される。
〃 20	1945	27	日本無条件降伏。新日本の教育方針が出される。
〃 21	1946	26	日本国憲法 公布される。日本大学三島に設置される。教育基本法、学校教育法 公布 6・3・3・4 制発布、教育委員会法 公布。 市内に中学校6校新設される。
〃 24	1949	23	三島北小学校建つ。国立遺伝研できる。
〃 25	1950	12	市立図書館開設
〃 41	1966	6	佐野美術館開館
〃 46	1971	1	三島市郷土館開館。

郷土の教育展について

今年、日本の学校教育が始まってから、ちょうど百年目にあたる。我が郷土三島でも、三島東小学校・三島南小学校・坂小学校が、それぞれ明治五年の設立であるので、百周年を迎えたことになる。翌明治六年には、中郷・徳倉・佐野の各小学校が開設されて、現三島市域の学校教育が、いちおうその緒についたのである。

その後、国運の進展につれて、学校教育も長足の進歩をとげ、当三島地域においても、公私立旧制中等学校・幼稚園等が設立されて、いっそう学校教育の充実をみたのである。

昭和二十二年に、現在の六・三・三・四の学制が定められて、我が三島市にも、幼稚園・小中学校・高等学校・大学が設立され、文化都市の名にふさわしい学校機構が整備され、社会教育の充実とともに、いよいよ教育の効果を挙げるべき時がきたのである。

しかし、この百年間は、学校教育にとつて、必しも順風満帆ということではなくて、随分多くの困難が横たわっていたのである。今回の教育展を通して、郷土の学校教育の発展の跡を詳しく、先人のご苦労に感謝し、これからの教育のあり方に、市民をはじめ多くの方々が、深い関心を与えていただけたら、まことに幸である。

教育長 吉川 静雄

展 示 案 内

- 学校のできるまで (江戸時代～明治5年ころ)
- 学校教育の夜あけ (明治5年～明治15年ころ)
- 広まりはじめた普通教育 (明治20年～明治45年ころ)
- 実業教育の発展 (大正元年～昭和10年ころ)
- 戦時下の教育 (昭和10年～昭和20年ころ)
- 生涯教育の時代 (昭和20年～現在)

- ▲ 寺子屋の学習
- ▲ 郷土の教育を
開いた人たち (秋山富南と吉原守拙)
- ▲ 子供たちのあそび

● 学校ができるまで

いま私たちが学んでいる学校は、いつごろからでききものでしょうか。

三島には、江戸時代の終りから明治のはじめにかけて、いくつかの寺子屋と漢学塾がありました。学校のなかった時代ですから子供たちは勉強をしたいと思えば、寺子屋や塾に通ったのです。

とくに中郷地区には寺子屋や塾がたくさんありました。それは現在のように法律によって地区割りに建てられたものでなく、創始者の自宅を開放したものが大部分でした。

したがって、寺子屋や塾の多い地域と少ない地域ができました。

義務教育が制度になっていない時代に、三島にこれだけ多くの教育施設があったということはおどろくべきことです。



寺子屋の教科書

● 学校教育の夜あけ

明治5年は学校教育の歴史にとって忘れることのできない年です。「学制」といって各地に学校を設けて、多くの子供たちが教育を受けられる制度ができました。

三島にはじめての学校が設けられたのもこの年です。久保町伝馬所（現在の郵便局あたり）の空屋を校舎にして「開心庠舎」という最初の学校ができました。

明治6年に「官立三島覺」と改名しました。これをはじめに、明治8年までの4年間に三島に開設された学校は、全部で10校ありました。以後、統一されたり、廃止になったりの変化はありました。が、ほとんどが現在の小学校の前身です。校舎を新築しないで、お寺を教室にした学校もありました。

「学制」の効果は、三島だけでなく全国に行きわたりました。



三条実美が書いた「三島覺の額」

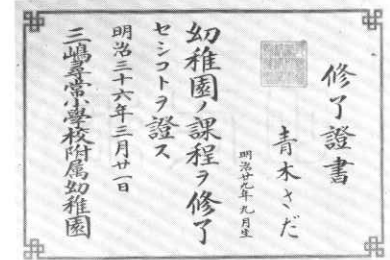
● 広まり始めた普通教育

明治政府のたてた「富国強兵」という目標は全国に広まり、国内ではいろいろな動きが活発になってきました。

学校教育の面でも著しい動きが見られ、あちこちに新しい学校が建てられました。これまでの小学校教育から、さらに上級の高等学校教育へと教育の巾が広がってきました。三島には田方郡立高等学校（現在の県立三島北高等学校）が明治34年に建てられました。高等女学校は尋常高等小学校を卒業した女生徒が入学しました。今の高等学校入学率と比べると、ほんとうに少人数の人たちしか進学できなかったようです。

また私立女学校として薔花女学校も設立されましたが、わずか数年で閉校してしまいました。

一方、幼児教育もはじめられ、今の市役所の場所に県下でも三番目にはやく幼稚園が建てられました。これが、現在の中央幼稚園になりました。



明治幼稚園の修了証書

● 実業教育の発展

大正時代は、小学校に実業補習学校が開設されました。独立した実業学校が建てられるなど、実業教育のはじまりの時代でした。

大正8年、小中島御殿地に町立三島商業学校が開設されました。商業科目が主体のこの学校は、現在の県立三島南高等学校の前身です。三島が町として次第に大きく発展するにつれて、町の商業を支える卒業生が必要になったのでしょうか。先生は、三島高女と兼任で間に合うほどの商業学校でした。

その他には、三島家政女学校（4年制）や実践女学校なども設立され、短期間のうちに3校の実業学校をもつようになりました。このふたつの実業女学校は、後にひとつになって、三島実科女学校と改名されました。これが現在の三島高校になりました。

社会の進歩と町の発展は、男生徒は商業学校で、女生徒は実科女学校でというように、実際社会にすぐ役立つ勉強を要求しました。



大正時代の生徒

● 戦時下の教育

大太平洋戦争が起こった年（昭年16年）に三島町と錦田村が合併して市制をしきました。

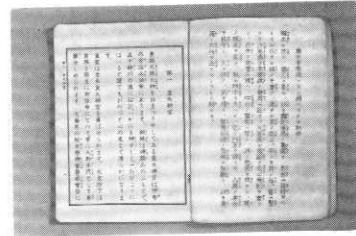
緊迫した時局の影響がいろいろな方面に及んでいた時代です。

「国民学校令」が公布されて、各小学校は国民学校と呼ばれるようになりました。「皇国民」として錬成されるような教育が行なわれたのです。この教育は教科書を改めることにはじまって、中等学校・高等専門学校・師範学校の国民学校化にまで広められました。

校外では少年団や子供会が作られて、公民訓練・神社参拝・勤労作業などをして錬成しました。

戦争が激しくなってくるとともに、学校の生徒たちにも影響が及んできました。「学徒勤労」で、生徒は工場などで労働しました。

また、空襲の激しい都会の子供たちは、「学徒集団疎開」といって、戦争を避け地方へ来て、勉強をしました。



国民学校の修身教科書

● 生涯教育の時代

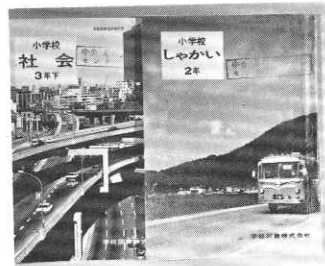
「日本国憲法」以後、日本は民主主義の国として生まれ変わろうとしました。「教育基本法」が布告され、「学校教育法」といって学校制度の法律も出され、現在の6・3・3・4の学校システムができあがりました。

三島には日本大学教養部（昭和21年）が設置されて、新しい制度のもとで大学が開校しました。

義務教育の年限が、小学校と中学校の9年間となり、高等学校には希望者が入学試験で入学するようになりました。

現在市内にある幼稚園は、中央幼稚園を除いて全部戦後に開園されたものです。幼稚園教育の充実も、あたらしい教育制度の特徴といえるでしょう。

教育は学校教育だけにとどまらないで、社会教育、家庭教育の分野を注目されています。市立図書館の充実、佐野美術館の設置などは、三島の人々が一生教育を受けたいという熱意のもとにできたといっ



現在の社会科教科書

▲ 寺子屋の学習

よみ、かき、そろばんの3教科が寺子屋の主要科目でした。よみは、本を読むこと、かきは、書を書くこと、そろばんは、計算することです。江戸時代、庶民は、武士のように漢学や洋学を本格的に習いませんでした。寺子屋で習うことだけで、生活するために十分だと考えました。商売の帳面を読んだり、書いたり、お金のかんじょうをしたりということが庶民の生活だったのです。

寺子屋でも上級になると、次第にむづかしくなりました。公用文書といって「関所手形」「借用証書」など、役所関係の文を書くことは、寺子屋の上級で習いました。

それにしても、寺子屋の学習は庶民の生活と深く結びついた初歩教育、実用教育といえるでしょう。

寺子たちは天神机という座り机で学習をしました。学問の神「天神さま」にあやかって勉強が上達するように祈ったものです。寺子たちはこの机で一日中習字をならいました。勉強が終ると机をさかさに積み重ね、その間に文房具を入れて帰ったのです。

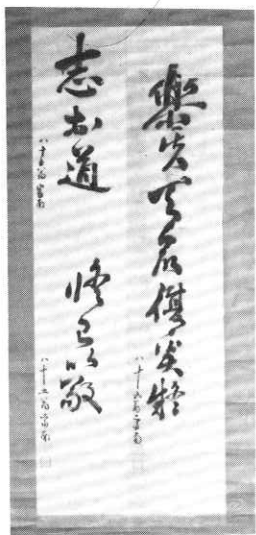


「女庭訓往来」は寺子屋の女子のための教科書でした。

▲ 郷土の教育を開いた人たち

郷土の学校の設立にあたって、何人かの教育の指導者の活躍を取りあげることができます。並河誠所、福井雪水、秋山富南、箕田寿平、吉原守拙などです。江戸時代から明治の初期にかけて、三島には多くの寺子屋と漢学塾がありました。かれらの多くはそこで活躍した師匠でした。江戸に出て学問を修め、後三島に移り住み、そこで地元の教育に或いは自分の研究に身をささげたのです。

その中の一人秋山富南は、享保8年(1723)7月安久に生まれました。当時三島宿で仰止館を開塾していた並河五一の門下生として学問を修め、師の志について地誌編纂を思いたち「豆州誌稿13巻」を書きあげたことは有名です。後年富南は、三島において塾を開き郷土の教育のためにつくしました。わたしたちは、こうした江戸時代の教育者の活躍を、今日の教育の発展に結びつけて考えずにはられません。



富南85才の時の書

● 吉原守拙

守拙は、文政2年(1819)駿河に生れ、後、伊豆の古奈邑(現長岡町)に移り住みました。士を志ぎして、15、6才の頃単身江戸に行って漢学を修め、また長沼流の兵学を修めたという文武両道の達人でした。大政奉還して明治時代になると、守拙は再び三島へ移りました。

三島に来てからの守拙は、開心庵舎の教師をはじめに以後26年間三島の教育の発展に努力をしました。明治29年(1896)病気で世を去るまでに、守拙の教育は広く三島以外にも知られ、誰が言い出したのでもなく「三島の聖人」と呼ばれました。



三島 初代校長
吉原守拙
(市立東小学校所蔵)

▲ 子供たちのあそび

時代が変わっても、子供たちの遊びたい心は変わらないものです。子供たちのあそびは、明治になってからも江戸時代のものが多い受けつがれていました。

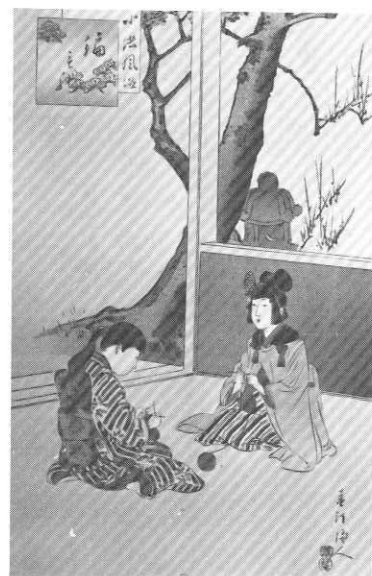
男の子の遊びにはメンコ、たこあげ、竹馬、こま回しなど、女の子には、ままごと、まりつき、羽根つき、お手玉など、それぞれ季節によってあそび方も違っていました。また子供たちは、そのころ流行していた芝居の役者などを画いた色刷りの錦絵など見たり、それを手製のタコ絵の見本にして遊んだりもしました。

時代が進展して、大正、昭和のころになると、子供の遊び道具にも手のこんだものなど多種類が出てきました。更に現在ではテレビなども子供のあそびに多くの影響を与えています。

子供たちが、よいおもちゃで楽しく遊ぶということは、幼いころの子供にとって、学校で受ける教育以上に強い影響のあるものです。ここではそうした子供たちのおもちゃについて振り返ってみたいと思います。



時代は変わっても、子供たちの遊びの主流は、こま回し、羽根つき、たこあげ、カルタなどでした。



家での遊び「あみもの」の絵